

39 イエスがそこを出て、いつものようにオリーブ山に行かれると、弟子たちも従った。40 いつもの場所に来ると、イエスは弟子たちに、「誘惑に陥らないように祈りなさい」と言われた。41 そして自分は、石を投げて届くほどの所に離れ、ひざまずいてこう祈られた。42 「父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いでではなく、御心のままに行ってください。」43 すると、天使が天から現れて、イエスを力づけた。44 イエスは苦しみもだえ、いよいよ切に祈られた。汗が血の滴のように地面に落ちた。45 イエスが祈り終わって立ち上がり、弟子たちのところに戻って御覧になると、彼らは悲しみの果てに眠り込んでいた。46 イエスは言われた。「なぜ眠っているのか。誘惑に陥らぬよう、起きて祈っていなさい。」

#### ◆教会の祈り

深い憐れみと豊かな恵みをもって、私たちを支え導いてくださる父なる神様。今日もまた、あなたは私たち一人一人を御目に尊くかけがえのない者として命に呼び出してくださいました。あなたは私たちがどこにいても、どのような境遇にあっても、私たちを見守る方であり、私たちと共にいて下さる方であることを深く感謝いたします。

主なる神様、私たちは今年も受難節の歩みを与えられ、主の十字架と復活を見つめつつこの時を過ごしています。あなたは独り子イエス・キリストのすべてを与え尽くしてください、私たちへの限りない愛と救いの御心を示してくださいました。けれども、私たちは自らの罪によって、感謝すべき、喜ぶべき恵みに気付かず、冷たい心と自らの頑なさによって捕らわれていることがどれほど多いことでしょうか。どうか、私たちをすべてのあなたに背く思いと力から解放し、御言葉を通して、信仰の喜びに躍動する生涯を歩ませてください。

私たちの主よ、あなたは、決して奪われることの無い救いと永遠の愛をもって、私たちを取り囲んでくださることのゆえに感謝いたします。私たちの世界は今、新型コロナウイルスの蔓延によって多くの人々が苦しみと不安の中にあり、世界・社会のあらゆるところに痛みが生じています。どうかすべての人々を守り、病める人には癒しを与え、助けを必要とする人には豊かな助けが与えられますように。私たちとこの世界が、臆病になったり、意気消沈して否定的な思いで満たされることがないようにしてください。父である神様、この痛みの中で、世界中のいたるところの教会において礼拝に支障が生じています。それによって教会に集うことが叶わず、今日もまた家庭で、あるいは病床で、それぞれに置かれた場であってこの主の日を守っている多くの兄弟姉妹がおられます。どうか、それらすべての方々と今共にいてくださり、豊かな恵みと平安を与えて下さるよう切に祈り願います。主の復活を信じる私たちが、キリストの福音を通して力づけられ、その輝く光を多くの人々と分かち合うことができますように。そして一日も早く、多くの兄弟姉妹と共に集い、いつものように礼拝を捧げ、声高らかに御名を讃美する日を迎えさせてください。

いま、私たちは御言葉を待ち望み、聖霊の導きを祈ります。どう

か、福音の御言葉によって、私たちを立ち上がらせてください。この祈りを、私たちの主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン

#### ◆説教

今日は、受難節の第三の主の日です。灰の水曜日からはじまった受難節は、イースターへの心備えの期間であると同時に、私たち一人一人が自分の信仰について考え、見つめなおす時でもあります。

今、私たち日本の教会もそうですが、世界のいたるところにある教会が、新型コロナウイルスの影響を受けています。ある教会では礼拝そのものが出来なくなっており、更に多くの教会で、教会員がいつものようには教会に集うということが出来なくなっている現状があります。これまで当たり前のように出来ていた「礼拝を捧げる」ということが、決して当たり前のことではなくなってしまいました。そこにおいて、私たちは大きな寂しさを感じています。教会に、いつものようには集うことが出来ないという寂しさがあります。しかし、今の私たちの気持ちや思いというものは、「寂しさ」という言葉では十分でないように感じられます。現実には、寂しさというよりも、私たちの中に哀しみが、痛みや苦しみのようなものが生じてくるという経験をしているのではないのでしょうか。それはどうしてでしょうか。おそらく多くの人にとって、教会は「イエス様と出会う場」であり、「神様と共にあるということを確認できる場」だったからではないでしょうか。教会に、私たちの慰めの場があり、励ましの場がありました。何よりイエス様との出会いの場があります。それは素晴らしい恵みでした。私たちの心の慰めであるのです。

しかしそれと同時に、私たちがイエス様と出会い、慰めと励ましを受ける場というのは、教会だけではなかった筈です。イエス様は、どこで私たちに会って下さるのか、主イエス様はいつ皆さんお一人お一人と会ってくださるのでしょうか。それは、何時でも、如何なる所においてもということです。今、皆さんの置かれた場が、イエスとの出会いの場であり、今この時おかれた所において、主と共に歩んでくださっている。それは紛れの無い信仰の事実です。私たちのいつもの場が、私たちと神様との出会いの場であり続けるのです。聖書が、その全体を通して語っていること、それは、主がいつもあなたと共に、あなたの傍らにいて下さるということです。つまり、私たちの生涯の全体を通して、すべての時において、主は確かに共におられるということでもあります。では、私たちは何によってそれに気付くことが出来るのでしょうか。それは御言葉を通して気づくことが出来ます。また祈りを通して、そのことに気付かされます。

今日はルカによる福音書 22 章の 39 節からの御言葉が開かれています。ここには、主イエス様が弟子たちと最後の晩餐を共にされたあと、オリーブ山へ出かけ、そこで祈りを捧げておられる姿が記されています。いよいよ捕らえられ、十字架につけられるという出来事を目の前にした箇所です。

「39 イエスがそこを出て、いつものようにオリーブ山に行かれると、弟子たちも従った。40 いつもの場所に来ると、イ

エスは弟子たちに、「**誘惑に陥らないように祈りなさい**」と言われた。41 **そして自分は、石を投げて届くほどの所に離れ、ひざまずいてこう祈られた。**」(22:39-41)

いま読みました 39 節には、主が「**いつものようにオリーブ山に行かれ**」たと記されています。次の 40 節には「**いつもの場所**」に来られたとあります。主イエス様にとって、オリーブ山はいつもの「場所」でありました。このオリーブ山がどのような場所だったかという、41 節に、主イエス様はそこで祈りをしておられたということが記されています。つまり主イエス様は、いつもの祈りの場をもっておられ、主イエス様の弟子たちも、主イエス様の後につき従って、オリーブ山にやってきたわけです。そして弟子たちは「**誘惑に陥らないように祈りなさい**」とお語りになり、祈るようにとの主イエス様の促しを聞いたわけです。

「祈り」とは何でしょうか。祈りとは、私たちの願い事がすべてではありません。祈りとは、第一には、主イエス様がそうなさったように、父なる神様と向かい合うことです。つまり主イエス様にとってオリーブ山という祈りの場は、父である神様と向かい合う場であり、主なる神様との出会いの場であったわけです。現代の私たちにとっては、一つは教会がそのような場であると思います。ですから、このようにして教会に通うことに困難が生じるということは、とても大きな痛みです。しかし教会だけが神様との出会いの場ではありません。私たちのいつもの生活の中で私たちは祈ることが出来、そこで主イエス様は確かに私たちに出会って下さるのです。

クリスチャンの時代、日本では 250 年間にわたって迫害が行われました。世界の歴史を振り返っても、日本ほど長い期間にわたってキリストを信じる者たちが迫害され、そして日本ほどの殉教者を出した国はありませんでした。この禁教下のクリスチャンにはもちろん教会などなく、公に集って礼拝をするということなど出来ない時代でした。しかしクリスチャンたちはオラショという祈りをし続けました。教会に集うことが出来ず、また十字架も持つことが出来ない中で、クリスチャンたちはその手を組んで祈りを捧げました。すると、親指と親指の組み合わされたところに十字架ができます。それを信仰のしるしにして祈り続けた多くの人々がいたと聞いたことがあります。こうした人たちは、教会といういつもの場は無かったわけですが、いつもの祈りというものがありました。

キリスト教の信仰において「祈り」はとりわけ大切なものです。信仰は持っているけれど、祈りはしないということはないと思います。神を信じるとは、祈りを捧げつつ生きるということです。主イエス様は弟子たちに、40 節ですけれど「**誘惑に陥らないように祈りなさい**」と言われました。主イエス様が仰せになった「**誘惑に陥らないように祈りなさい**」とは、一体どういうことでしょうか。辛いことが起こらないように祈ろうということでしょうか？ 主イエス様が語られた「**誘惑に陥らないように**」というときの「**誘惑**」という言葉は、もう一つ別の言葉に訳すこともできます。それは「**試み**」とか「**試練**」ということです。主の祈りの中に「**われらを試みにあわせず**」とあるわけですが、その「**試み**」や「**試**

練」という意味があります。しかし新共同訳聖書はあえて、「**誘惑に陥らないように**」と訳しました。ここでは単に苦しみや辛い経験のことばかりがみつめられているのではありません。私たち人間は、苦しみや辛さの中で、私たちが神様から引き離そうとする力に向かい合い、信仰が無意味なものであるかのように思わせる力と格闘することがあります。信仰生活や教会生活の喜びが失われ、イエス様と共にいるという感激や喜びが失われるということがあります。ここに「**誘惑**」の正体があります。だから、主イエス様は祈りなさいと言われました。

しかし、今日の福音書の中心は、単なる弟子たちへの祈りの勧めで終わってはいません。ルカ福音書には、祈ることが出来ず、眠り込んでしまった弟子たちの姿が記されています。この弟子たちの眠りは、単なる生理的な睡眠の状態だけをしているのではありません。彼らは、主イエス様が今何をなさっているのか、ここで何が起きているのか理解することが出来なかったのです。けれども、そのような人間の眠りの中においても、主イエス様の祈りは続けられていきます。41 節から 44 節にこのようにあります。「**41 そして自分は、石を投げて届くほどの所に離れ、ひざまずいてこう祈られた。42 「父よ、御心なら、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、御心のままに行ってください。」43 すると、天使が天から現れて、イエスを力づけた。44 イエスは苦しみもだえ、いよいよ切に祈られた。汗が血の滴るように地面に落ちた。」**

ここで主イエス様は、ご自分の十字架を目の前にして、父である神様の御心が成し遂げられるようにと祈られました。御心の実現を祈って下さったのです。この父である神様の御心は「**救いの御心**」です。あなたを救うという揺るぐことの無い御心がある。主はその御心の実現を祈って下ったのです。

私たちの目の前には、飲むのが嫌だと叫びたくなり、逃げ出したいくなり、あるいは何としても避けたい十字架があるかもしれません。しかし、それらの中で、私たちは神様から引き離され、信仰を失わされるというのではなく、誘惑に陥らないように祈ることを通して、父である神様の御心を受け止め、そしてその救いの御心によって今この自分が守られ、支えられており、そしてこの先においても、それがたとえ十字架を負うということであったとしても、神の愛と救いの御手から私たちを引き裂くことは出来ないのだということを知らされるのです。神の御心の中に、私たちの最善があることを信じて祈るのです。

先週の礼拝でも紹介致しましたマルチン・ルターは「**信仰とは、神の恵みに対する、生きた大胆な信頼だ。**」と言いました。祈りを捧げつつ生きるという生き方は、まさにこのような神様への大胆な信頼に生きることです。祈りをもって神様のほうに向かい合ったとき、今までも、今も、そしてこれからも、私たちの生涯のすべての時が確かに神様の御心の中に覚えられ、支えられていたことに気づかされます。この神様の御心への信頼の中で、私たちは十字架を担いつつも永遠の朝へと続く歩みを、死から命へ、十字架から復活へと至る勝利の道を辿るものでありたいと思います。